

高校生・大学生における AIDS 問題意識調査

田中 雅子* 藤井 香* 河邊 博史* 斉藤 郁夫*
南里清一郎* 永野 志朗* 関原 敏郎*

最近、異性間性行為による感染者の率が増加するに伴い、AIDS はますます身近な問題となってきた。性的な活動が盛んになりはじめる高校生・大学生は、この AIDS 予防対策の重要な対象であり、彼らが AIDS に関する正確な知識をもち、その予防法を知り的確に対応することは、今後 AIDS の蔓延を防止する上で極めて重要である。

そこで、今回高校生・大学生を対象に、AIDS の知識理解度およびそれに関連する諸問題について調査し、現状の把握と今後の AIDS 予防を推進する有効な方法について検討した。

対象と方法

調査対象は、15～23 歳の K 高校・K 大学在校生で、男子高校生 279 名（平均年齢 16.5±1.3 歳）、大学生 816 名（男子 607 名、女子 209 名、平均年齢 20.5±1.9 歳）の計 1095 名であった。調査方法は、1993 年 11 月の学園祭時にアンケート方式で行い、無記名・即時回収と

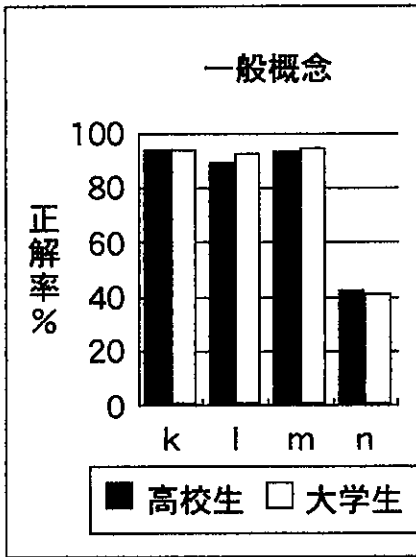
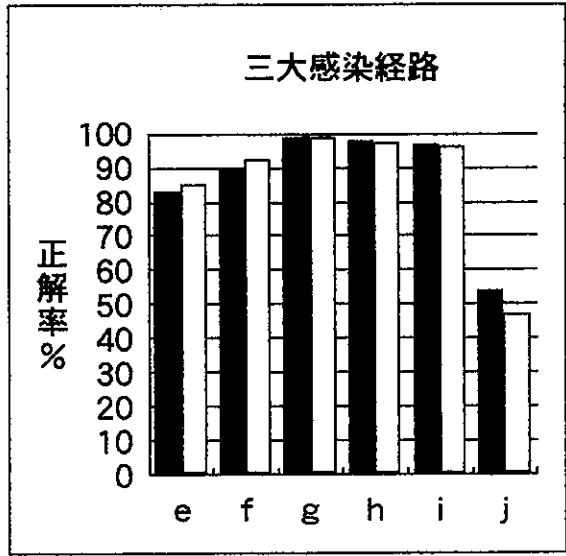
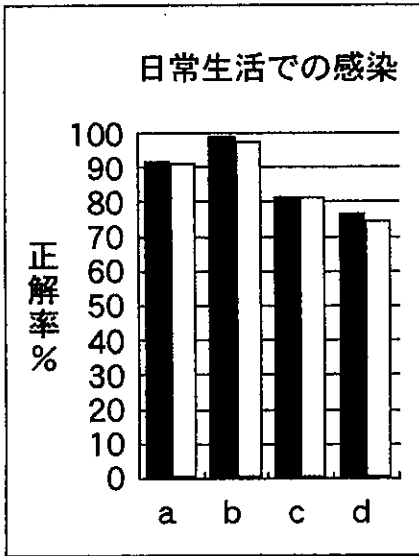
した。知識調査では、14 項目（図 1 参照）についての正誤を問い、それに関連する問題（A. 家庭での性・AIDS 教育の充足度、B. HIV 感染者との付き合い方、C. 交際相手との話し合い）では選択方式で回答を求めた。なお知識調査では、その場で本人に正解とパンフレットを配布した。

成 績

知識調査の結果を図 1 に示した。総体的には、高校生と大学生の正解率に有意差は認められず、平均正解率は高校生 85.8%、大学生 85.7%であった。このように全体としての正解率は高かったが、一部の問に対しては、正解率の低いものもあった。例えば、問 d. の正解率は高校生 76.4%、大学生 74.6%とやや低く、問 j. に関しても高校生 53.9%、大学生 47.2%と低かった。また、問 n. の正解率は高校生 42.3%、大学生 41.3%と最も低かった。

関連問題で、家庭と AIDS 教育については、A. 「家庭での性および AIDS 教育は十分であったか」の問には、高校生 75.9%、大学生 71.0%が「どちらも不十分であった」と答

* 慶應義塾大学保健管理センター

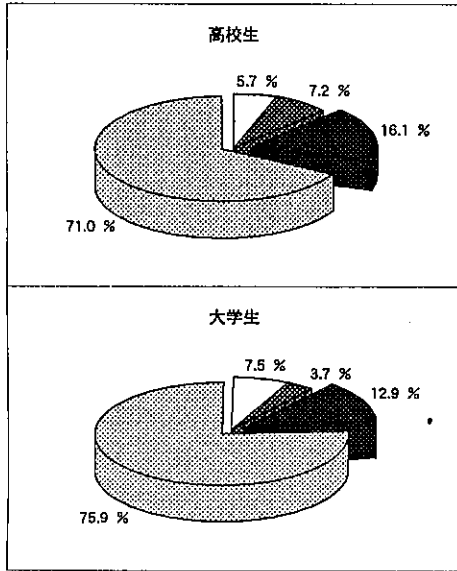


- a. 感染者の使ったコップで、まわし飲みをすると感染の可能性がある
- b. 感染者と同じ風呂やトイレに入ると、感染する可能性がある
- c. 感染者とのハブラシやカミソリの共有は感染の可能性が高い
- d. 感染者を刺した蚊に刺されても感染しない
- e. 感染者の精液や膣分泌液を口に含むのは危険である
- f. 膣内で射精しなければ、コンドームを使わなくてもHIVには感染しない
- g. セックスの時コンドームを使うことは、AIDS予防に効果がある
- h. 肛門性交さえしなければHIVには感染しない
- i. 感染者から生まれた子供は、感染している可能性がある
- j. 現在、日本国内において輸血血液から感染することはない
- k. AIDSはHIVというウイルスが、体内に入ることによって感染する
- l. 現在の医学では、一度体内に入ったHIVを殺すことはできない
- m. 保健所でAIDS検査を受けるときは匿名でもよい
- n. 献血をすればAIDS検査も行われるので、HIVに感染しているか知ることができる

図1 知識調査結果

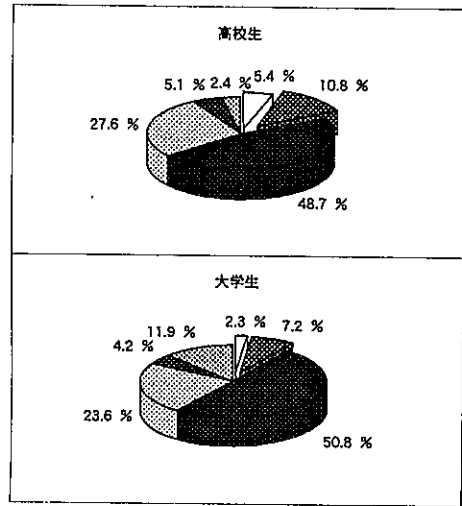
高校生・大学生における AIDS 問題意識調査

A. 家庭での性・AIDS教育の充足度



- 性教育は十分
- ▨ AIDS教育は十分
- どちらも十分
- ▩ どちらも不十分

B. HIV感染者との付き合い方

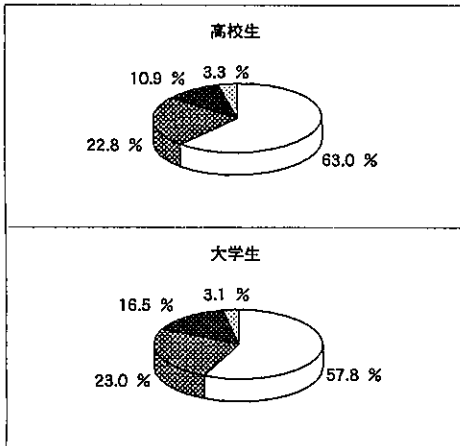


- 一切付き合わない
- ▨ なるべく付き合わない・最小限の付き合いにする
- 感染に注意して付き合う
- ▩ 今までと変わらない・意識しない
- ▨ 今まで以上に親密に付き合う・相談相手になる
- ▩ 無回答

C. 交際相手との話し合い

交際相手とは、避妊や性行為感染症について、オープンに話し合えますか？

高校生 はい 64.9% いいえ 33.0%
 大学生 はい 79.2% いいえ 20.8%



- 相手に嫌われると思うから
- ▨ 必要なことと思わないから
- 必要であると思うが、知識がないから
- ▩ その場限りの相手だと思うから・相手に愛情をもてないから

図 2 AIDS に関する諸問題に対する回答

えていた (図 2)。HIV 感染者との付き合い方については、B.「身近な人が HIV 感染者の時、付き合い方を変えるか」の間では、高校生の 48.7%、大学生の 50.8%と約半数が「感染に注意して付き合う」と答えていた (図 2)。以上を含む肯定的な回答を示した者は、高校生 81.4%、大学生 78.6%であった。交際相手との話し合いについては、C.「交際相手とは、避妊や性行為感染症について、オープンに話し合えるか」の間には、高校生 64.9%・大学生 79.2%が「はい」と答えていた (図 2)。「いいえ」と答えた理由の第 1 位は、「相手に嫌われると思うから・恥ずかしいから」で、「いいえ」と答えた者の中では高校生 63.0%、大学生 57.8%にみられた。

考 察

知識問題では、普段よく耳にしたり、パンフレットに載っていることなどは高い正解率であった。しかし、AIDS の正しい感染機序を理解していないため、あまり耳にしないことの理解が曖昧であったり、昔の情報 (輸血血液による感染があった) のイメージがまだ強く残っている者もいた。また、問 c.「感染者とのハブラシやカミソリの共有は感染の可能性が高い」や、問 d.「感染者を刺した蚊にさされても感染しない」では、どの程度の接触であれば感染し、また感染しないのかが理解されていないため、低い正解率であった。そこで、断片的でなく系統的に知識を与えることが急務であり、そのためにはすべての生徒・学生が教育を受けられるように、必須科目の一つとして授業に取り入れる必要性も考

慮された。

次に、AIDS に関する諸問題についての意識・認識調査結果では、A.「家庭での性および AIDS 教育は十分であったか」の間には、「どちらも不十分」が高校生・大学生とも 7割以上を占めていた。これは、家庭で教育する立場の親が、知識がないために教育できなかった可能性も考えられるが、それ以上に性をタブー視したり、偏見を持っているために教育していない可能性の方が大きいと考えられた。性行為は、人の最もプライベートな行動であり、本能的欲求に基づく行為であるため、教育という形でさえ伝えることが困難である。しかし、HIV 感染者が急増しているアジアにあって、また、対外的にも外国との交流が多い日本において、このままでは AIDS を防ぐことが困難になる。現代の若者達は、性に関してオープンになってきているが、この若者達が正確な知識を持ち、自ら行動し、子供が生まれたらその子供に積極的に教育できるような、従来からの古い性に対する意識の変革をはかる教育も必要であると考えられた。

B.「身近な人が HIV 感染者の時、付き合い方を変えるか」の間には、「感染に注意して付き合う」「今までと変わらない・意識しない」「今まで以上に親密に付き合う・相談相手になる」などの基本的に HIV 感染者を差別しない意見が、高校生 81.4%、大学生 78.6%に認められた。一方、排他的な意見として、「一切付き合わない」「なるべく付き合わない・最小限の付き合いにする」は、高校生 16.2%、大学生 9.5%にみられ、これは差別へつながっていく可能性がある。HIV 感染者

に接する場合に、知識としては安全であるとはわかっていても、情緒的には何となく不安で、少しでも危険な接触は避けようという行動がおきやすい。これが、偏見や差別に結びついてしまう可能性がある。行動が知識に伴っていない現在、知識教育に人間教育・人権教育をプラスしていかなければならないと考えられた。

C.「交際相手とは、避妊や性行為感染症について、オープンに話し合えるか」の間には、高校生の 64.9%、大学生の 79.2%が「はい」と答えていた。「いいえ」と答えた理由の中で第1位は、「相手に嫌われると思うから・恥ずかしいから」で、高校生 63.0%、大学生 57.8%であった。次いで、「必要なことと思わないから」「必要であると思うが、知識がないから」「その場限りの相手だと思うから・相手に愛情をもてないから」の順であった。精神的に未成熟であり、価値観も確立していないこの年代には、相手にどう思われるかで行動してしまいがちである。したがって、この時期に性に対する捉え方の教育を行うことが必要であると考えられる。性に関心が高く、情報や教育を求めているから、柔軟性に富んだ考え方をもち吸収も速い。だからこそ、この時期に学校・家庭・社会の3方向から分担し、または重複しながら、責任をもって教育していかなければならないと考えられた。

総 括

(1) 15～23 歳の高校生・大学生(計 1095 名)を対象に、AIDS の知識理解度、およびそれに関連する問題について、1993 年 11 月

の学園祭時にアンケート調査を行った。

- (2) 知識問題では、高校生と大学生の間に正解率の差は認められず、平均正解率は高校生 85.8%、大学生 85.7%といずれも高かった。
- (3) 家庭での性および AIDS 教育の状態は、7割以上が不十分であると答えていた。
- (4) 身近な人が HIV 感染者の時の付き合い方では、8割前後が差別なく付き合いと答えていた。
- (5) 交際相手とは、避妊や性行為感染症についてオープンに話し合えるかでは、高校生と大学生で 14.3%のひらきがみられ、高校生では 64.9%しか「はい」と答えていなかった。

以上より、知識教育だけでなく、人間教育・人権教育も同時に行っていかなければならないことが示唆された。それには、従来からの古い性に対する意識の変革をはかり、学校・家庭・社会からの偏りのない教育が必要であると思われた。

文 献

- 1) 渡部基：エイズに関する青少年の知識・態度・行動。学校保健研究, 36(1): 37～45, 1994
- 2) 武田敏, 阪上皖庸, 稲垣稔：エイズ対策・最近の経験に学ぶ(エイズの社会的教育的問題・職場のとりくみから・カウンセルの経験から)。健康管理, 9: 4～37, 1993
- 3) 山形操六：エイズ予防と学校教育。日本医師会雑誌, 109(10): 1580～1583, 1993
- 4) 根岸昌功, 宗像恒次, 櫻井賢樹：エイズ教育テキスト。エイズ予防財団, 第4版
- 5) 日野原重明, 他：HIV とカウンセリング。日本公衆衛生協会, 第5版
- 6) 小林俊治, 埋忠洋一：企業のエイズ対策マニュアル。蔵書房, 1963